

発行にあたって

今年度の新入部員約一名という危機的状況のなか、今日の部会に出てこない一年生を心配しつつ報告書を作りました。

体育会山岳部にもはや未来はないのでしょうか。また今夜も酒を飲みます。

(外池)

目次

北アルプス	P1	含む冬合宿
上越	P9	含む春合宿
八ヶ岳、中央アルプス	P13	含むプレ春合宿
東京近郊	P16	
南アルプス	P19	
その他	P22	

1. 唐沢岳幕岩

【メンバー】鮎沢

【日程】1986年9月22日～24日

9月22日(晴れ→快晴)

七倉(8:40)－唐沢出合(9:20)－大町の宿(10:40)－左岩壁明峰ルート登攀開始(11:30)－大岩テラス(16:45)－終了点(19:30 そのままビバーク)

下部2PはS字ルートを登る。最後の2Pはヘッドランプ登攀。計9P(ノーロープ2P)

9月23日(快晴)

BP(6:05)－右稜の頭(6:35)－大町の宿(8:00)－中央カンテ畠山ルート登攀開始(9:55)－中央バンド左端(17:10)－大町の宿(18:30)

斜上するピッチが多く悪戦苦闘。三寸バンドからのピッチでロープがブッシュに絡まり回収のためボルト一本残置。さらに第2スラブでルートを誤り、懸垂の支点を打とうとしてボルトを全部落としてしまい泣く泣く上部を断念。中央バンドをトラバースし、暗闇の中大凹角ルートを下降。

9月24日(晴れ)

七倉へ下山。

2. 唐沢岳幕岩(史上最高にミジメな敗退行)

【メンバー】鮎沢、丸野(アスペンクラブ)

【日程】1987年2月11日～12日

大凹角ルート目指して入山するが、2月だというのに春一番が吹き荒れ気温も6月なみに上昇。しまいにはドシャぶりの雨となり高瀬ダム下のトンネルから出られず。七倉の指導所の軒下に一泊して下山した。ムナシイ、実にムナシイ山行(山行と言えるだろうか)であった。

3. 双六岳～抜戸岳(冬山偵察山行)

【メンバー】鮎沢、河野

【日程】1986年10月17日～19日

6月17日

笠谷橋バス停(8:15 晴れ)－林道1/2 5Km標識の次の沢出合(10:00 晴れ)－撤退地点(12:30 雪)－出合(14:30)－笠谷橋へ戻る－バス停－新穂高温泉(18:00頃)

アプローチの林道部分の地図が手違いで入手できなかった。それでも、林道の尽きるところが取付きだからということで、そのまま出発。林道は続いているが、地形がピッタリという所から取付く。深いヤブ漕ぎの末、尾根を間違えたとわかり撤退。正しい取付きと思われる尾根を見極めた後とにかくデポを優先し、翌日一般道から笠に登ることにする。

しかし、ここで河野のキスリングが大きく裂け、この案も没。結局、小池新道から双六へ上がることにして新穂高へ入る

10月18日

新穂高(6:30 晴れ)－小池新道入口(8:10 快晴)－鏡平(11:00 晴れ)－弓折岳(12:25 曇り)
－双六小屋(14:00 曇りときどき雪)

思った以上の雪と重荷に苦しみながらもなんとか小屋に着く。小屋では、お茶・お菓子・ウイスキー・ケーキをふるまわれ、当日入山した四人ほどの登山者をまじえて歓談する。冬季小屋も使わせてくれるなど、小屋の人たちには本当にお世話になった。(双六小屋にデポ完了)

10月19日

双六小屋(6:45 快晴)－笠新道分岐(11:30 雪)－蒲田川左俣林道(14:30 曇り)－新穂高温泉(15:20 曇り)

好天に恵まれ笠ヶ岳を目指す。弓折岳から先はトレースもなく、10月だというのにラッセルになる。雪がしまっていないだけに苦勞する。笠新道分岐にさしかかったところで視界がきかなくなり、これ以上進むのは危険、笠の冬季小屋は開いているか定かでなく、ツェルトしかない我々には少々つらい、ということで下山した。

4. 笠ヶ岳南西尾根～槍ヶ岳～中崎尾根(冬山合宿)

【メンバー】記述なし

【日程】1986年12月15日～24日

毎日の天気図がある

笠谷橋(8:30 小雨)－ヒアケ谷出合(11:00 雪)－1,231mの次のコル(11:50 小雪)－1,550m付近TS(15:25 雪)

多勢のOBの見送りを受け、“まあ何とかなるさ”と開き直って東京を発ったものの、ビデオ・デッキと囲炉裏の組合せがとつても斬新な神岡鉄道の車窓の外の雨に煙る奥飛驒の冬景色に心は重い。なぜかあの五ヶ山先輩の唄「奥飛驒慕情」そのままの入山となってしまった。そんな登山

者の感傷に関係なく、奥飛驒の小中学生やオバチャンはやたら元気であった。

笠谷橋でバスを降り、雨具を着用して笠谷林道へ今合宿の第一歩を踏み出す。偵察時は地図の不備により取付きが同定できずに敗退しているの、地図とにらめっこしながら進む。小雨がミゾレとかわるころ南西尾根(正しくは支稜)取付きへ。

ヒアケ谷を少し遡ってからとりつく予定だったが、偵察の結果、靴を脱いで渡渉が避けられそうもないので、もう少し林道をたどったあと適当な斜面を選んで登りだす。かなり急なうえに笹に積もった新雪が滑ってイヤらしかったが根本をつかんで強引にゼーハー登りをくりかえすことしばしで尾根上に出る。積雪はほぼ 0cm でブッシュにうっすらと新雪が乗っている程度である。

所々露岩のまじった明瞭な尾根状の急登をくりかえし何とか水を作れそうな積雪となってきたあたりで適当な平地を見つけて幕営。一年生にとっては冬山初体験が雨とヤブ漕ぎに終始しなとも気の毒な一日だった。

12 月 16 日

TS(7:00 曇り～小雪)－1,982m(10:45 雪)－2,150m 付近 TS(15:55 快晴)

細野メガネ紛失、鮎沢キスリング破損によりやや遅い出発。今日も雪ののったブッシュのヤブ漕ぎから始まる。しの竹をもった一年生は難儀しているが、彼らのために思ってあえて代わってはあげない。1,621m 周辺は平原状となり、他パーティーの赤布たよりに歩きやすそうところをぬって高度を稼いでいく。再び尾根状を呈してくると同時にようやく雪も深くなってきたが、まだまだブッシュは濃くワカンはつけられない。本日の幕営予定地 1,982m に着くころには湿った雪が本降りとなる。この先は南西尾根で唯一ザイルが必要と思われる岩峰帯の通過だ。

ここに幕営した後ルート工作にでて fix するかこのまま次にテントがはれそうな 2,150m まで行ってしまうか。鳩首思案の末、一応 2,150m を目指し、時間の足りない場合、適当なところから fix しながら 1,982m まで戻ってくることにして出発。次々に現れる小岩峰はいずれも左右からひどいブッシュ漕ぎに苦しみながらまくが、ブッシュがあったからこそザイルなしでまけたというのも又、事実である。積雪が多くてブッシュが埋まってしまえば左右とも谷へ一直線に落ちて行く雪壁になると思う。

第 3 のやや大きな岩峰は、左側の雪のバンドをトラバースした後小さなコルへ約 5m の懸垂下降。このあたり、残置されたフィックスロープも多い。小コルから急な木登りで岩のリッジに上がりギャップをまたいだりしてリッジをしばらく辿ると最大の第 4 岩峰にぶつかる。この間、岩のリッジに 5m のフィックスを 2 か所、たいした場所でもないので手がかり用に 8 の字結びで輪を作っておいてあげたのに、小野は一人きまじめにプルーミックでピレイをとりつつ登ってきて、途中で立ち往生するという笑えぬ一幕があった。

第 4 岩峰にぶつかったところで、左側の小沢の源頭にあたる急雪壁に出、その上部を左へトラバースし岩峰の左端に食い込んだ緩いルンゼを直上すると(この間 40m フィックス)2,150m 付近の広い雪尾根に飛び出した。

第 4 岩峰のフィックス工作中からみるみるうちにガスが晴れ始め、ついにはド快晴となる。下界は一面の雲海、そして眼前には穂高連峰の雄姿！！先に 2,150m まであがっていた連中は少し先までラッセルしてきて“笠がみえた！”とはしゃいでいる。明日はなんとか笠のピークを踏みたいものだ。井上に天気図をとらせてテントを張る。荘厳な夕日の後は満天の星空となった。

12 月 17 日

TS(6:45 晴れ)ー2,417.4m(10:45 快晴)ー笠ヶ岳山荘 TS(15:30 快晴)

ええ天気や！今日中に笠ヶ岳山荘に入ろうと勇んで出発。ブッシュもそううるさくなくなったのでワカン着用。おおもね膝上下のラッセル。でもハイマツ帯に入るとはまってしまって脱出一苦勞。右前方に笠ヶ岳がその端麗な姿をみせているが、絶望的に遠い。おまけに荷も重い。天気が良いのが唯一の慰め。ダブルボツカしながらひたすらラッセルしやっと 2,147.4m 竹造ピークへ。ここからの笠ヶ岳はすばらしい。マナスルなんて見たこともないのに“日本のマナスルだ”と変な納得をする。

このあたりから森林限界で雪はだいぶ締まってきたがところどころブレイカブルで、いったんはまると体力の消耗が著しい。2,338m をすぎてしばらくしてからワカンをとってアイゼン着用。でも少しタイミングが早すぎてだいぶはまってしまった。錫杖岳からの稜線が合するところまでは、ガレが所々顔をのぞかせた急な雪面をゼーハー登る。川名嬢が片方のアイゼンがはずれたのに気づかずそのまま残して行ってしまうというこれまた笑えぬ一幕があった。

あいかわらず天気は良く穂高連峰、南アルプス、八ヶ岳から富士山まで見えるが連日の長時間行動と重荷のためみんな疲労こんぱいうつろな目をしておぼつかない足取りで山頂への岩まじりの稜線を進んで行く。岩がだいぶ出ており、一回落石があったが何とか無事に笠ヶ岳のピークに立つ。記念撮影をして 360° のパノラマを楽しんでから笠ヶ岳山荘にかけ下る。冬季小屋をさがすがなかなか見つからない。斎藤が少し離れたところにある小屋の方に行ってみるが、何の根拠もないくせに“あれはちがう”などとぬかすので、あきらめて山荘脇にテントを張る。

昨日に続いて満天の星空。西穂ロープウェイのものらしい灯かりがポツンと見えて郷愁を誘う。一日分かせいだので、豪華な夕食をとって疲れた体をシュラフに横たえた。

12 月 18 日

4 時 30 分に起床した時はまだ星が見えていたのに、朝食を済ませてパッキングを始めるころには SW 風が吹き荒れて雲が飛来し、視界 10m ほど。鮎沢、河野で偵察に出るが山荘下の広い斜面でルートがわからず引き返し、沈を決定。悪天が予想されたので冬期小屋搜索を開始。昨日、斎藤が自信をもって“ちがう”と言った小屋が冬期小屋であった。彼は時折根拠もないのに自信をもってうそをつく癖があるので困る。

小屋内を整備しテントを張り終えたころ(8:30)より雲がはれ展望が開け出した。再び鮎沢、河野、外池の 3 人でしの竹をうちながら偵察に出る。抜戸岩のあたりで完全な晴れ間が広がり、あわて

て引き返す。雲海も低く南寄りの風も弱まったので疑似好天とはわかっていたが鮎沢は秩父平まで進むことを主張。しかし、やはりそれには賭けの要素が強いし疑似好天のあとは冬型が定着して沈が長引きそうなこと、同じ沈なら小屋で快適にすごしたいこと、連日行動の疲れをとりたいこと、等の理由により沈に決定。

お屋ころより視界が悪くなり結果的に沈にしてよかったがそれは日程・食糧・燃料に十分な余裕のある我々だから言えるのであり、そうでない社会人パーティーならば、疑似好天を積極的に利用してもっと早いうちから行動を起こしたと思う。

我々の母親兼シェフ河野特製の沈殿スペシャルお汁粉はとっても美味！！日本海にある低気圧が抜けた後の冬型は強まりそうである。

12 月 19 日

あまりの息苦しさに 5 時 30 分頃目がさめる。気温が高いせいかテントの本体・内張りともにグシヨ濡れ。おまけに夜半から強まった南風のために小屋の入口より吹き込んだ雪がかなり積もっており、通気もなにもあったものではない。入口近くの 1 年生に聞いてみると、やはり息苦しくて目覚めみんなが苦しそうにハーハー言って寝ているのでおかしいとは思ったそうだが、小屋内にテントを張るとこんなもんだと思って黙っていたそうだ。なんて奴だ。

外へでてみるとホワイトアウトだが、雪はほとんど降っておらず風も弱い。冬型になって風雪強まると思っていたのでやや拍子抜け。16 時の気象通報で、これは日本海に弱い低気圧が発生したためとわかる。おかげで気温も高く過ごしやすい沈だった。

沈殿 2 日目、ついに手作りトランプ登場(天気図用紙をガムテープで裏打ちして切ったものに絵を描いて作る)。「ドボン」なるゲームが大ヒットし、レーシヨンのアメやチョコを賭けて一日中このゲームにうち興じた。

今日の沈スベはすいとん、まさにおふくろの味、ごちそうさまでした。

12 月 20 日

沈殿 3 日目。5 時起床、外はホワイト・アウトしておりNW風が強い。冬型になったようだ。サラサラした粉雪がふりつもり午前中に除雪 3 回。昨日に比べるとずっと冷え込んでいる。またもドボンにうち興じてしまう。ひまつぶしにイヤイヤながらというのでなく、みんな夢中になって他人をハメようとしているところがコワイ。

正午ころより風がいちだんと強まり、ガスはれて青空がのぞく。山々も時折姿を現す。16 時の気象通報をとってみると、**高気圧(原文では、Hに○がついている)**がはりだして等高線が東に突き出して冬型が弱まっている。夕方には快晴(下界は雲海)となり夕焼けに映える穂高連峰のながめがすばらしい。象足のまま小屋の屋根の上へ駆けあがってしまうくらいもう気分はサイコー！！“明日は双六だ”と心に誓って眠りにつく。

12 月 21 日

笠ヶ岳山荘(6:40 晴れ)－秩父平(8:35 曇り)－弓折岳(10:25 晴れ)－双六小屋(12:30 晴れ)

高層天気図から、昨日の午後から晴天をもたらした高気圧が東に去って次の気圧の谷が足早に接近していることが分かったが、秩父平までは進めるはずと思って出発。東の空は不気味な朝焼けである。ところが、抜戸岳にさしかかるあたりから西空より黒い雲堤が押し寄せてくるではないか！ヤバイ、早く早く足を動かすが、プレイカブル・クラストの斜面は大変歩きづらく焦ってしまう。しかし、シェフからラッセルマシーンへと変身した河野のドトーのラッセルによりまだ晴れ間ものぞくうちに秩父平に達した(ここまでアイゼンのみ)。

さきほどの黒い雲堤は四散し再び青空が広がり始めたし、ここから先はどこでも幕営できるので、行けるところまで進むことにしてアイゼンとワカンを併用する。どういうわけか素晴らしい快晴となり、暑いくらいの陽気だ。右手に槍ヶ岳が刻々と近づいてくるが、同時にラッセルも深くなる。弓折岳への登りでは腰までのラッセル。弓折岳から双六小屋までがすぐそのように見えてなかなか遠くキツかった。鮎沢が弓折岳南尾根からのエスケープルートでのしの竹を打ちながら一人遅れて行くが、残りのしの竹を持った連中がそのままドンドン先行してしの竹の補給ができず、退路が確保されないという大チョンボがあった。反省。

双六小屋に入るところより西よりの風が強まり視界もきかなくなる。10月下旬のデポも無事回収したものの、あまり減ってなくてただでさえ重い荷物にこのデポが加わるかと思うと心まで重くなる。かといって、後々のことを考えるとバカ食いする勇気もなく結局夕食に1メニュー増やしただけでそのまま分担して持ち帰ることになった。

12月22日

双六小屋(10:30 小雪)－硫黄乗越(11:45 曇り)－千丈沢乗越TS(14:35 快晴)

5時起床。外はややホワイト・アウト気味だが縦沢岳への斜面はなんとか見える。高層天気図(21日21時)がラジオ不調のためとれず、判断材料がないため9:10の気象通報まで待つことにする。冬型ではあるが、高気圧は弱く移動性となって張りだしそうな気配なので、出発を決意。トイレまで小屋内にある超快適な双六の冬期小屋で豊富な食料に囲まれて数日を過ごしたいと思った者もいたと思うが、天気予報はクリスマス寒波の襲来を今年も予想していたので何としてもクリスマスまでに下山したいという願いが勝った。

風が強く、少し雪もまっているがろうじて視界は効く。縦沢岳のあたりは雪稜のコンタクト・ラインがわかりづらかったが、時折明るくなって視界が効くのを待って慎重に通過。初めての風雪(大げさか?)の登高だったが一年生もビビらずについてきて一安心。小野が強風下でケツをムキ出しにしてみんなの前で排便したのにはあきれた。

西鎌尾根の岩稜帯に入るところより青空が広がり始め、槍がすぐ目の前にその勇姿を現した。いくつかの岩峰は雪の状態が良かったのですべて蒲田川側または千丈沢側から巻くが、所々腰

までのラッセルや不安定な雪板もあらわれ緊張した。結局ザイルなしで千丈沢乗越に着く。完全な快晴となり移動性高気圧もしばらく居座りそうなので、予定を変更してこのままここに幕営。早速ブロックを切り出す。横尾尾根 JP 基部から槍の穂先までの高度差はそれほどに絶望的に感じられた。夜は質量ともにゴージャスな飯を食べ、酒もいっぱい飲んで登頂の前祝いをした。風もなく快適な一夜だった。

12 月 23 日

TS(7:00 快晴)―槍の肩(7:45 快晴)―頂上(8:15 快晴)―TS(9:45 快晴)―槍平(14:50 晴れ)

登頂日にふさわしく快晴の朝だ。谷岡ヤスジなら槍の穂先にニワトリを立たせて「アサ～」と叫ばすにちがいない。全員ハーネスをつけ、2つのアタックザックにテルモス、ザイル等をつめて出発。肩までの飛騨沢源頭の大雪面はところどころ雪が不安定で肝を冷やしたがおおむねアイゼンがよく効く。穂先への登りも雪はそう着いておらず夏のハシゴ、クサリが見えていたのでノー・ザイルで行く。そしてついにそしていささかあつけなく 3,180m の絶頂に立つ。見渡せば、日本中の山岳がすべて見える、それくらいよい天気だ。ラッキーすぎる自分たちがコワイ気さえする。いろんな山をバックに写真を撮り合う。

下りはザイルを 2 ピッチフィックスして懸垂下降。ラストの鮎沢だけビレイしてもらってクライムダウン。肩からの雪面も危なげなく下って無事 TS に戻る。この下りの途中で中崎尾根より上がってきた早稲田の山岳部に会った。彼らには悪いが、先に登頂して頂上を独占出来てよかった。

こころウキウキ撤収し、バッチリトレールのついた中崎尾根を下り始める。早稲田のフィックスが張っており、ありがたく使わせてもらったが、降雪直後などあのあたりのナイフエッジは足元から崩れそうで大変コワイと思った。

それにしても、無事登頂をすませ、あとは下山だけ。天気は良いしトレールもバッチリルンルンというわけで気持もゆるんだのもわからなくはないが、2つの支点間に張られた 1 本のフィックス・ロープにみんなでゾロゾロしがみついていたのはマズイ！反省。

J.P.からの急雪壁は慎重に 40m 1P の懸垂下降。ここでも気が緩んだのか、鮎沢は回収時に末端をほどくの忘れてしまい、少し登り返したのだった。反省。

あとは、奥丸山の前まで延々と登り下りを繰り返す。雪がくさってきたので、とちゅうからワカンにはきかえる。尾根上には他パーティーのテントがチラホラと目についた。急な支尾根を灌木をたよりに駆け下りて槍平へ。天気も良いし合宿最後の夜なのでうす暗い小屋の中はやめて林の中にテントを張る。下級生は余った食料を喜々として食べ、上級生は残りの酒をこっそり飲みまくり合宿最後の夜は楽しく更けてゆくのであった。OB のどなたかの差入の「手水」は水っぽいという一年生もいたが、飲めば飲むほどに味の出るすばらしい酒だった。

12 月 24 日

槍平(8:40 晴れ)－新穂高温泉(11:25 曇り)

今日も良い天気が続きそうなのでのんびりパッキングしてのんびり出発。吉沢さんから注意をいただいた滝谷出合、チビ谷出合、ブドウ谷出合もこの積雪では何の心配もない(しかし、正月にチビ谷出合でナダレ遭難があったと効いた時はさすがにゾーッとした)。錫杖岳の稜線のながめを楽しみながら左俣林道を下って新穂高温泉に到着。10 日間にわたった合宿の全行程を終了した。

<総括>(CL 鮎沢)

一口に言って寡雪と好天に恵まれた合宿であった。双六小屋に5日分の食糧・燃料をデポし、入山時にも12日分の食料・燃料を持って万全を尽くすだけに、いささかあつけないという印象はぬぐいたい。しかし、それも好天時にそれだけの重荷を持って目標地点まで進むことができる機動力があってはじめて可能になることであるから、好天時の機動力という点に関して現在の部の状態はある程度のレベルに達していることが今回の合宿で証明されたと言ってよいと思う。

これからの課題は、この機動力をどう山行に生かしてゆくかにあると思う。現在のような形で過剰と言ってよいほどのスペアを持って行く縦走オンリーの合宿をこれからも続けていくのなら別として、岩壁とまでいかぬにしても岩稜・雪稜・雪壁など登攀要素の多いルートで合宿の対象として選ぶ場合、過剰な装備は機動力の桎梏でしかない。もちろん、登山が安全を第一義とするものである以上、機動力のための軽量化と安全保障のための非軽量化という二律背反はことに積雪期の山行の場合避けられないものである。しかしそれは、登る側の人間の努力によって克服できるものでもある。各人が多少の荒天ではビクともしない全天候型の登山者として自分を鍛えていってほしい。

またここ数年の冬山はクリスマスころに寒波が襲来して年末年始に荒れる傾向にある。この傾向を生かし、比較的やまが穏やかなうちに合宿が終了するように日程を工夫すれば難ルートの速攻も可能であると思う。そのような点を考えると、今回の冬合宿は HUHAC の合宿のあり方が従来の伝統的なものから脱皮して新しい方向へ向かうべき時を示すものだと言えるのではないだろうか。

5. 谷川岳ーノ倉沢南稜フランケダイレクトルート

【メンバー】鮎沢、多和(アスペン・クラブ)

【日程】1986 年 9 月 28 日

9 月 28 日(曇り)

登攀開始(7:05)ー終了(11:10)国境稜線を縦走し、西黒尾根下降。

鮎沢は一の倉初見参。とにかく人が多いのにビックリした。1P 目鎌型ハングは支点の効き甘い。3P 目核心部のフェースは外傾ホールドできびしい。上部はルートがいりくんでいて、いつの間にか

南稜馬の背に出た。5 ルンゼの頭への登りが一番怖かった。

6. 武尊山川場谷

【メンバー】外池、河野、小野、細野

【日程】1986年10月4日～5日

10月4日(曇り→雨)

沼田－(バス)－川場温泉口－(1:15)－川場谷出合－(8:00)－沖武尊山頂 TS

10月5日(晴れ)

TS－(3:40)－久保バス停

<感想>

この沢は岩魚の宝庫である。歩きながら魚影をいくつも見た。サオを持って行かなかったことが悔やまれる。源頭部のツメは2時間ちかくヤブ漕ぎが続いた。ガイドでは40分となっていたのだが……。いろいろな意味で印象深い沢だった。

7. 清水～巻機山～清水峠～土合(上越国境稜線縦走)

【メンバー】外池、谷口

【日程】1986年10月11日～13日

10月11日(曇り時々雨)

六日町－(バス)－清水－(5:00)－巻機小屋

10月12日(雨時々曇り)

小屋－(10:00)－清水小屋

10月13日(雨→曇り)

清水小屋－(3:00)－土合

<感想>

巻機山～桧倉山～ジャンクションピークに至る稜線は、道がボロくかつヤブがひどいので非常に不快である。通過中は雨が降っていたので、滑ったり転んだり大変な騒ぎであった。

8. 奥利根刃物ヶ崎山(上越国境 春山偵察山行)

【メンバー】外池、小野、細野、山内、井上

【日程】1986年10月18日～19日

10月18日(曇り→雨→雪)

水上－(バス)－須田貝ダム入口－(2:00)－八木沢ダム(取付き)－(5:00)－家の串山

10月19日(雪→雨→晴れ)

TS－(4:00)－八木沢ダム－(2:00)－須田貝ダム－水上

<コメント>

前週に巻機から縦走した時は上越は秋であった。が一週間の間に冬となり、稜線付近はまっ白であった。ピッケルも持たず秋山ルンルン気分でやってきた我々は、ヒザまでもぐる雪の前に為す術もなく敗退し家の串山から逃げ帰り、八木沢ダムで敗退記念にビーフ・ストロガノフパーティーを行いウサをはらした。

ちなみにパーティーというより浮浪者の宴会風であり、ビーフと言いつつ豚肉しか入っていなかったが、このストロガノフは大変おいしかった。

9. 天神平～谷川岳～万太郎山～土樽(春合宿の食糧 5 日分を肩の小屋にデポ)

【メンバー】外池、川名、河野

【日程】1986 年 10 月 25 日～26 日

10 月 25 日(晴れ)

土合(ロープウェイ)－天神平(3:10)－谷川岳肩の小屋(2:00)－大障子小屋

10 月 26 日(晴れ)

小屋(4:30)－万太郎山－土樽

<コメント>

大障子小屋では社会人 3 人組が酒を飲んで底抜け大騒ぎをし、川名さんにチョッカイだしたり歌を歌ったりしたあげく小屋の中にゲロをまき散らして沈没していった。小屋に着いてから一人がダミ声を張り上げるまで約 30 分という早ワザであった。日程に余裕のない社会人は酒を飲む時でさえアセリ気味なのである。社会人はどこか違う、と感じた。

10. 上越国境、谷川岳(春合宿)

【メンバー】

【日程】1987 年 3 月 18 日～23 日

3 月 18 日(雪)

八木沢ダム(6:45)－家串山(10:21)－刃物ヶ崎頂上 TS(12:33)

八木沢ダムまでのアプローチは長い歩きを覚悟していたが、タクシーの運転手の厚意によりダムまで乗り入れてくれたので一気にアプローチを短縮できた。早速取付く。いやな湿雪に悩まされながらも偵察の時よりもよほど早く進み、10時半前には家の串に着く。ラッセルはたいしたことない。さらに1ピッチ進むと核心部の岸壁の下に出る。外**で偵察。Climbing journal で中級にランクされるだけあってハンパでない。結局、キスリングを背負って登るところではないとの結論に達し、南東側斜面をトラバースして巻く。雪崩の危険があるので、間隔をおいて歩く。僅か1ピッチで頂上へ出る。ここで幕営。アツと言う間に2日分の日程を消化してしまった。しかし、ザイルが泣いている。

3 月 19 日 (曇り→晴れ→**地吹雪**記号で書かれているが、その意味がわからない)

TS(6:15)－桧倉山(9:23)－ジャンクションピーク(11:58)－清水峠(13:30)

清水峠を目指し今日は早発。途中、岩峰にはばまれて大きく下を巻いたり雪庇を気遣ったりしながらも 2 ピッチあまりで国境稜線へとび出す。ここからはやや単調な稜線歩き。しかし、桧倉、大烏帽子と越えて行くにつれ疲労蓄積し JP を登りきったところでは息絶え絶え。先頭と最後尾の間の差がかなり目立つようになる。

なお、大烏帽子のあたりでスキーマの単独行氏に遭う。JP の下りでは風強まり視界も悪くなる。先頭と最後尾の見通しが不可能になることもしばしば。さらに、湿雪のため、2～3 歩歩けばアイゼンがダンゴ。清水峠避難小屋に着いた時は救われたような思い。

3 月 20 日 (雨/曇り)

視界悪くさらには雨。せめて蓬峠まで動くことも考えたが、正午過ぎても天候回復のきざしなし。すぐその送電線監視小屋さえ見えない。結局沈滞。

3 月 21 日 (曇り/晴れ)

TS(6:26)－武能山(10:00)－茂倉岳(13:16)－谷川岳(14:56)

昨日のガス、うそのように晴れ上がり、遠く天神平の電灯まで確認できる。一気に谷川目指して出発。蓬峠あたりからまた視界悪くなるが武能山までは順調に進む。

武能山の下りでガスに巻かれてルートを失う。外池・小野の偵察により左側に派生する側稜を下ったことを確認。主稜線までもと来た道を引き返すことにする。11:30 頃主稜線へ戻る。およそ 1 時間 30 分のロス。なんと、主稜線に戻ったとたんガスがきれいに晴れあがるではないか。背後には、いかにもガスのおときはルートを誤りそうな地形が、そして前方には偵察隊の残したトレールがはっきり見えるではないか。何という山だ。

茂倉岳への長い登りにさしかかる。茂倉岳からは一投足で一の倉。しかし、一の倉からコルへ下り、そこから谷川岳への登りがまたきつい。谷川に立ったのは 15 時前。これで縦走の半分を越したわけだがここで新たな重荷がわがパーティーにのしかかる。デポである。予定より早く来すぎたためデポなど使わずとも十分。かえって重荷になるだけ。食糧消化のため翌日は沈滞を期待したが、天気図を見るとどう考えても明日は絶好の行動日和である。

3 月 22 日 (晴れ→曇り)

TS(6:34)－万太郎山(10:03)－仙の倉山 TS(16:00)

雪はくさっており、ツボ足で行動。また晴天に恵まれ、というよりたたられ、暑い。みんなヤツケを

脱いで行動。何となく登り下りを繰り返していく。が、エビス大黒の頭下にクレバスがあり、細野転落。幸いけがなかったが一瞬肝を冷やす。また、大野、風邪気味のためかなり遅れる。さらにはこの強い日射しのなかただ一人サングラスをかけなかった山*雪盲。しかし、自業自得なので、同情する者誰もなし。

3月23日(曇り)

TS(7:00)ー平標山ー三国山(10:53)ー17号線三国トンネル(12:36)

最終日も霧で視界悪し。平標を軽く越え、国境稜線を南下する。平標山の家から先トレールなく輪かんをつけラッセル。湿雪は不快だ。とにかくいやな湿雪に苦しめられた山行だった。

11:00頃、最後のピーク三国山に着く。あとは下りのみ。三国峠を経て12:36、17号線三国トンネルの新潟県側出口に到着。長い縦走は終わった。そこで解散。

外、河、山は苗場でskiing。他はヒッチハイクしたトラックで三国トンネルを抜け群馬県側へ。ちなみにそのトラックは子豚輸送用のトラックでした。

11. 七久保駅～与田切溪谷～空木岳～木曾駒ヶ岳(中央アルプス北部縦走)

【メンバー】小野

【日程】1986年9月24～25日

9月24日(晴れ→曇り)

飯田線七久保駅(6:15)ー(3P)ー飛龍の滝(10:00)ー(2P)ー越百山(13:00)ー(1P)ー仙涯嶺(14:10)ー(2P)ー空木岳(17:15)ー木曾殿越(17:50)

9月25日(快晴)

木曾殿越(4:15)ー(2P)ー檜尾岳(7:12)ー(2P)ー極楽平(9:30)ー(1P)ー木曾駒ヶ岳(11:00)ー千畳敷(11:55)ー(ロープウェイ)ー駒ヶ根

創立記念日を利用し突然思い立っての単独行。与田切溪谷は快適。悪場もあるが特に難しくもない。ガイドブックには徒渉ありなどと恐ろしいことが書いてあるが、水量少なく全く問題なし(ただし、増水時の安全は保証の限りではない)。

飛龍の滝の上で一時道を失う。越百山から先は稜線散歩。仙涯嶺と空木岳頂上直下が岩っぼいほかはなんということない。しかし、行き違う人もほとんどない単独行のこと、木曾側から押し寄せるガスがなんとも不気味、心細い。空木岳頂上では日没30分前。駒峰ヒュッテ泊りにするかとも考えるがもう一コマ先に・・・と思い木曾殿越まで下ったのがいけなかった。木曾殿山荘は唯一の営業小屋で素泊まりがなんと¥3,500円、ここで出費すると翌日ロープウェイに乗れなくなるので道端でビバーク。すでに日没後、ビバーク適地探せず岩陰で風をしのぐのみ。

翌25日、寒さに耐えかねて4:15夜道を出発。ヘッドランプの灯かりで赤いペンキをたどりながら

歩く。あー危ない。ビバーク疲れで夜明けてもスピード上がらず、コースタイムより大幅に遅れる。極楽平よりロープウェイ駅を見たときはもうへとへとで、一気に駆け下りたい気もするが最後の力を振り絞って宝剣越え。そして木曾駒ヶ岳の頂上に立つ。稜線上から見る宝剣岳はガレキの山にしか見えなかった。もちろん、千畳敷から見あげる宝剣は雄大なのに……。なお、宝剣の木曾側にはほとんど垂直に切れ落ちた壁がある。木曾駒からは一気に駆け下って終点千畳敷へ。帰りの列車の中では眠り通しだった。

12. 中央アルプス滑川宝剣F沢

【メンバー】鮎沢、丸野(アスペン・クラブ)

【日程】1986年11月23日～24日

11月23日(快晴)

BC(11:40)－(A沢下降)－F沢 F1 登攀開始(13:00)－極楽平(16:30)－BC(17:45)

バス、ロープウェイを乗り継いで宝剣山荘にBC設営。雪が少なく壁は夏壁。仕方ないので氷を求めてF沢に行く。

F1とチョックストーン滝でスタカット。手ごろな氷が多く、シーズン初めの足慣らしにはちょうど良かった。上部雪壁は長く急でしんどい。

11月24日

夜半から暴風雪となり、テントがつぶれたのでミゾレまじりの雪の中千畳敷へ退散。それにしても中アの交通費は高い。

13. 八ヶ岳広河原沢3ルンゼ

【メンバー】鮎沢

【日程】1987年1月1日

1月1日(晴れ→曇り)

学校(6:40)－船山十字路(7:40)－二俣(8:35)－3ルンゼ出合(10:55)－阿弥陀岳(13:00)－美濃戸口(15:15)

12月30日に幕岩の大凹角ルートを単独で登ろうと思い大町の宿に入るが天気悪く、壁を落ちるスノーシャワーにびびり、逃げ帰る途中立ち寄る。

すべての滝をフリーソロで直登。3ルンゼ上部は風が吹くとスノーシャワーがものすごく、ひきはがれそうになることもしばしば。樋状6mの滝は氷が下まで届いておらず、岩登りからダブルアックスとなった。

14. 八ヶ岳(pre 春合宿)

【メンバー】

【日程】1987 年 3 月 3 日～10 日

3 月 3 日(晴れ)

清里駅(6:45)－美しの森－牛首岳(12:30)雪洞泊

6:45、人っ子ひとりいない清里を出発。いよいよ pre 春合宿の始まり。つい先日降雪があったらしく、目指す八ヶ岳は純白。美しの森から新教寺尾根に取付く。下部は雪少なく快調に進むが、牛首岳直下で雪深くなり、輪カンをつける。12:30 牛首頂上。頂上直下に雪洞設営。作業開始 12:40 完了 15:00。かなり時間がかかる。居住性はまずまずよるもさほど寒くない。なお、ピッケル、ポリタンク等の装備を忘れた者が約一名いた模様である。

3 月 4 日(晴れ→曇り)

牛首岳(6:22)－赤岳頂上直下(14:00)－赤岳鉱泉(16:45)

真教寺尾根はなかなか手強い。ラッセルも深い。10:00 雪壁にぶつかる。かなり急ではあるが、アイゼンを付けノーザイルで慎重に登る。雪壁を越えると雪稜にさしかかり、間もなく上部岩壁下に出る。ここでザイルを出してフィックスする。登攀中に天候悪化。強風のためコールが届きにくくなる。ルート選択が適切でなかった点もあり、全員が頂上直下にそろったのは 14:00。ここから岩場を慎重に進む。懸垂下降も 2 か所ほど。やっとの思いで文三郎尾根の頭にたどりつき、ここから行者小屋へ向けて文三郎道をかけ下る。赤岳鉱泉に着いた時すでに 16:45。お疲れ様。重い荷を背負っての赤岳越えは想像以上にハード。一様ぐったり。しかし合宿はまだ始まったばかりである。

3 月 5 日(曇り視界悪し→晴れ)

中山乗越手前の斜面で雪訓(ピッケルストップ、ザイルワーク)。ただし、ピッケルストップは斜面の状態悪く、道で行う。コンディション悪く練習量の不足は否めない。9:30 雪訓終了。このあと予定通り岩稜へ行くか中止するかもめめるが、結局、BC へ引き返す。だが、予想に反し昼ごろから天候回復。午後、河、小、大、山はジョウゴ沢へ遊びに行き残りは“穴掘り”何と、外、風邪悪化し高熱。

3 月 6 日(雪/曇り 視界悪し)

外、熱下がらず。天候も悪く待機。9:10 の気象通報により天気は回復傾向と判断して出発するが、実際には回復しなかった。外、今日は動けないため南峰リッジ隊が河、大、阿弥陀北稜隊が小、

井、山、細の臨時編成。視界悪く、阿弥陀隊、ルート誤る。南峰リッジ隊と交信の結果 BC へ引き返す。テントでラジオを聞いてすごす。この日、今合宿のテーマ曲誕生。“筆あそび”なる遊戯について知ったのも今日。これで事実上 2 日の停滞。なにかしら行動しているのだが、日程全く消化できずあせる。

3 月 7 日(晴れ→雪)

幸い外の体調回復。当初予定通りの編成で阿弥陀北稜および石尊稜へ。北稜隊は快調であったらしく、一気におハチ巡りも終えて 13:30 には BC へ(出発 6:15)なお、第 2 岩峰井がリード。それにひきかえ石尊隊は、ルートファインディングには慎重を期したつもりが、結果的には末端から忠実にとりつくことになりかなり遅れる。稜線直下でも難儀、おハチ巡りは中止し、すでに雪の降り始めた地蔵尾根を下る。15:45 帰着。とくに難しいところはなかった。

3 月 8 日(晴れ)

今日はみんなで南峰リッジへ。6:35 発。しかし、細不調のため BC へ引き返す。そのため、左稜隊外、大 and 小、井の編成。中央稜隊、第 2 岩壁に氷がはりついており非常に困難。外大隊が左稜側ルンゼを登り、大井隊が岩壁を悪戦苦闘の末登る。この時、事件が発生した模様。確保中の井からアンカーの結び目の調節を頼まれた大がアンカーを解除してしまった、というもの。幸い事故には至らなかったが、その夜論争。登攀終了後河、小、大、井はおハチ巡り。井は 2 回目のおハチ巡りである。

3 月 9 日(雪)

沈滞

3 月 10 日

結局、無名峰稜は中止。今日はジョウゴ沢でアイスクライミング。細はアイスクライミング初体験である。F2 を登った後、右俣で主にトップ、ロープで遊ぶ。あるいは、クライミングよりも写真撮影のほうにきょうじていたのではあるまいか。その後、本谷のゴルジュをつめ大滝下の 3 段 50m を登って今回の合宿の全日程を終了する。美濃戸口へ下山。外、小、大、井が鮎沢家へおじゃまし御柱祭の写真集をみながらめったにお目にかかれない高級なウイスキーをふるまっていた。ごちそうさまでした。

15. 笛吹川東沢釜ノ沢

【メンバー】外池、川名、河野、細野

【日程】1986 年 9 月 27 日～28 日

9 月 27 日(晴れ→曇り)

塩山－(タクシー)－西沢入口－(4:30)－釜の沢広河原TS

9月28日(曇り→雨)

TS－甲武信岳－(近*新道)－バス停 合計5時間行程

<感想>

釜の沢に入るまでは単調な河原歩きで面白くない。釜の沢のナメはさすがに美しかったが短くあ
つげなく終わってしまった。

16. 奥秩父縦走

【メンバー】井上

【日程】1986年10月2日～5日

10月2日

塩山駅バス停で泊

10月3日(晴れ)

塩山駅－(バス)－乾徳山登山口(8:20)－乾徳山(11:50)－白檜平(17:30)

10月4日(曇り)

TS(7:20)－北奥千丈(9:30)－甲武信小屋(15:30)

10月5日(晴れたり曇ったり)

TS(7:40)－十文字小屋(10:43)－(途中でヒッチハイク)－梓山(12:20)－(バス)－信濃川上駅

<感想>

はじめての単独であり自分のペースで歩けたのが喜びだった。山行後社内で引地、鮎沢隊(小
川山からの帰路)に出会う。

17. 小川山ハードフリー入門

【メンバー】鮎沢、引地 OB

【日程】1986年10月4日～5日

10月4日(晴れ)

ガマスラブ、小川山レイバック

10月5日(快晴)

友和、さよなら百恵ちゃん、春の戻り雪

場ちがいな所に来てしまった。やっぱり僕はヘルメット、アブミ、ジャンピング・ボルトを持って
ないと不安でたまりません。それにしてもみんなうまいなあー。

18. グレンデ

場所	日程	参加者
越沢	1986年11月10日	鮎沢
	同年11月16日	鮎沢、井上

	同年 12 月 29 日	鮎沢
	1987 年 2 月 7 日	鮎沢、外池
	同年 2 月 14 日	鮎沢、川名、谷口
広沢寺	1986 年 11 月 6 日	鮎沢
	同年 11 月 27 日	鮎沢
	同年 12 月 12 日	鮎沢
	1987 年 2 月 20 日	鮎沢、川名、井上
日和田	1986 年 11 月 20 日	鮎沢
	同年 12 月 13 日	鮎沢、井上、外池、斎藤、川名、山内
	1987 年 2 月 1 日	鮎沢、谷口、川名

19. 笛吹川東沢アイスクライミング

【メンバー】外池、斎藤、河野、小野、井上、山内

【日程】1987 年 1 月 24～25 日

1 月 24 日(曇り)

西沢入口ー乙女の沢出合TSー西のナメ沢ー乙女の沢出合

1 月 25 日(雨→曇り)

TSー西沢入口

<コメント>

24 日夜から降り出した雨により乙女の滝は水が流れ一部崩壊というありさま。おまけにフライを忘れてテントの中に深さ 10cm 以上の水たまりができ、24 日の夜は排水作業に終始する。

ずぶ濡れになった我々は氷の浮く川を何度も徒渉しつつ、下界に逃げ帰ったのであった。

20. 金峰山(増富～金峰山～大弛～信濃川上)

【メンバー】小野、細野

【日程】1987 年 2 月 24 日～25 日

2 月 24 日(晴れ→雪)

初めの予定では雁坂峠までの積雪期縦走であったが、いろいろの事情により大弛峠から escape する。最初につまづきは、道路工事のためバスが増富温泉まで入らず 8km 手前で降ろされたことである。しかし、運よく、2 度にわたって親切な車に拾われ、9 時前には増富に着く。瑞牆山荘までの林道は全く雪なし。登山道に入って積雪。大日小屋の上あたりからアイゼン使用。金峰頂上は 13:00 頃。頂上から下り始めると雪深くなり輪カン使用。結局大弛まで着けず朝日峠付近で幕営する(17:00 前)。さて、翌日の行動はどうしたものか? きょうの調子では、明日一日で甲武信小屋まで行くのはかなり難しく新たな積雪も予想される。天気も良くない。2 人で相談しているうちにだんだん 2 人とも弱気になり大弛からの escape 案が急浮上する。

2 月 25 日(雪)

9:30 発。15分で大弛峠到着。国師岳ピストンも考えていたが雪は降り続けているためそれも省略。信濃川上へと下る。途中、行程短縮のためと小径に入ったがそれが失敗。後でわかったことだが橋が落ちており廃道となっていた。一瞬あせったがなんとか道を見つけ出し林道へ出る。

13:00 頃川端下到着。村営バスで小海線信濃川上駅へ向かう。

(記録紛失のため、正確な時間がわかりませんでした。すみません。小野)

21. 富士山(プレ冬合宿)

【メンバー】鮎沢、小野、大野、外池、河野、井上、細野、山内

【日程】1986年11月27日～30日

11月27日

夜行発。富士吉田駅ステーションビバーク

11月28日

5合目佐藤小屋下まで歩いて登り幕営。午後、7合目付近まで行き雪上訓練(今年は雪が少なく大沢7合目まで行かねばならなかった)。

11月29日

前日と同じく大沢7合目付近にて雪上訓練を行う。午後、大野は予定通り途中下山。鮎沢、小野は8合目まで登りビバーク訓練。外池、河野、井上、細野、山内は自主的な雪上訓練を行い、5合目に戻る。

11月30日

鮎沢・小野隊と5合目隊は7合目付近にておちあい8合目付近まで大沢を登りそれから夏道沿いに頂上アタック。天候にも恵まれてアタック成功。あとは急いで吉田に下山。

<所感>

一年生は初めての冬山体験。アイゼンに足を十分慣らすことができ良かった。富士山特有の強風と氷の恐怖を知ることができた。

22. 甲斐駒ヶ岳

【メンバー】井上、持田、坂口、藤本(高校時代の級友)

【日程】1986年10月9日～12日

10月9日

甲府駅

10月10日(曇り)

甲府駅(6:15)－(タクシー)－広河原ロッジ(8:00頃)－早川尾根小屋(11:35)

10月11日(雨)

TS(8:00)－北沢登山小屋(13:15)

10月12日(曇り)

TS(5:40)－甲斐駒頂上(8:10)－北沢登山小屋(11:20)－北沢峠バス停(12:40)

<感想>

いつも連れて行かれる立場だったのが、連れて行く立場にかわったのでちょっと積極的になれて面白かった。また、パーティーの平均体力よりも自分の体力が上だったので、楽でよい。

23. 甲斐駒ヶ岳赤石沢前衛壁 A フランケ右フェース同志会ルート

【メンバー】鮎沢、河野

【日程】1986年10月10日～11日

10月10日(曇り)

黒戸尾根をヒコーラ登って8合*まで行くが、あまりの人の多さにAフランケの頭の*に入る。

△の下に黒点2つ、岩室？

10月11日(雨)

予想通りの雨だが一本登っておきたかったのが最初から最後までアブミを離さないという右フェース同志会ルートに取付く。よくぞうったり！という感じのポルトラダーをたどる。途中雪と岩の会ルートに入ったり河野が2P目の小ハングで落ちたり雨もやまないしで2P目終了点より敗退。8合*まで登り返して黒戸尾根をトボトボ下った。

24. 甲斐駒黒戸尾根5合目まで～明星山P6南壁柴田ルート(一部フリースピリッツ)

【メンバー】鮎沢、外池

【日程】1986年10月31日～11月1日

10月31日(晴れ)

「赤石沢Aフランケ～Bフランケ～奥壁」に今年最後の挑戦をするつもりだったが読みが甘く5合目ですでに積雪があり冬装備を持たない我々は点線を決意。松本駅の本屋で明星山のルート図を手書きで写し、その日は南小谷駅どまり。

11月1日(快晴)

南壁は大変なにぎわいよう。フリースピリッツにもすでに数パーティー取付いていたのでフリーにこだわらず人工をまじえて直線的に柴田ルートに登る。上部からの落石がすごく非常に恐ろしい。上部左フェースルートの予定が先行するパーティーとタイムアップで断念。南壁の頭より西面ブッシュ帯を下降。あわただしい山行であった。

25. 甲斐駒ヶ岳黄蓮谷右俣

【メンバー】鮎沢

【日程】1986年12月6日～8日

12月6日(快晴→晴れ)

横手(9:30)－5合(13:50)－白稜* (14:25) △の下に黒点2つ

非常に暖かく、谷からは水音が勢いよく聞こえている。

12月7日(曇り→雪)

* (7:00)－二俣(8:15)－奥の滝(11:20)－本峰(13:00)－5合(14:50)

奥千丈の滝下部あたりまで氷結甘くふみぬきに注意。奥千丈の滝上からは堅い氷で快適。すべての滝をフリーソロで直登。奥の二俣からスネくらのラッセルをして風雪の頂上に抜ける。感激！！

12月8日(快晴)

のんびり横手へ下山。

26. 甲斐駒ヶ岳黄蓮谷左俣～赤石沢奥壁中央稜～仙丈岳

【メンバー】鮎沢、丸野(アスペン・クラブ)

【日程】1987年1月4日～10日

1月4日(快晴)

竹宇(7:35)－5合(14:30)

バットレスをめざす12日分の食料、装備の重さにダウン。

1月5日(曇り→雪)

5合(6:45)－白稜* (7:20)－60m垂直の滝上(11:45)－8合(13:25)－5合(14:25)

60m垂直の滝は左の凹状部を45m登ってピッチを切る。水氷でピックが良く効いた。ほかはずべてフリーソロで直登。源頭部トレールありたすかった。

1月6日(晴れ→曇り)

5合(10:20)－8合* (13:15)－頂上直下にデポ(14:55)－8合* (15:35)

南岸を低気圧が通過し新雪が30cmほど積もったため移動日とする。

1月7日(快晴→曇り)

* (6:50)－中央稜登攀開始(7:30)－黒戸尾根(14:50)－頂上(15:45)－長衛小屋(18:30)

第一バンドは急雪壁で非常にコワイ。右ルンゼ、左ルンゼは日が当たるとすぐナダレた。中央稜は1P目上部の浅いチムニー状がクラックにつまった氷を利用してダブルアックスとなり、非常にシビア。8mクラックはひざが入り思ったより楽。上部雪壁はブッシュがなければとても登れそうもない。

赤岩ピーク直下で1Pスターカット。天気が良くラッキーだった。

1月8日

停滞(寒冷前線通過)

1月9日(曇り→雪)

長衛小屋(7:15)－仙丈岳(12:05)－北沢峠(15:10)

森林限界を出るとものすごい風雪で視界がほとんど効かない。正月の赤布たよりに何とか頂上まで行くが大千丈岳方面への降り口がわからず前進を断念。北沢峠へ引き返す。

1月10日(曇り)

北沢峠(9:20)－戸台(12:50)

天気は回復せず。稜線はガスに包まれている。残りの燃料とスベアと相談し、バットレスまで行くのは無理と判断して下山する。

27. 甲斐駒ヶ岳尾白川北坊主の沢

【メンバー】鮎沢

【日程】1987年1月16日～18日

1月16日(快晴→曇り)

横手(8:55)－5合(13:25)－白稜*(16:45)

△の下に黒点2つ。岩小屋、岩舎？

1月17日(雪)

* (12:05)－北坊主沢 F2 より敗退－*(16:45)

夜半より雪となり、お昼まで様子を見る。小降りとなったので、出発するが、河原のラッセルが非常に厳しくバテバテになる。なんとか北坊主の沢にたどりつき、F1をなんなく登りF2に取付くがボコボコの氷でなかなかアックスが決まらず腕が疲れきってしまい、1/3ほぼのところからクライムダウン。もうあきらめて帰ることにする。岩舎に戻る途中、氷を踏みぬいて淵にはまり、腰まで水につかってしまった。

1月18日

下痢で一睡もできずフラフラになって黒戸尾根を下る。

28. 甲斐駒ヶ岳尾白川西坊主の沢、北坊主の沢

【メンバー】鮎沢

【日程】1987 年 2 月 16 日～17 日

2 月 16 日(曇り)

横手(8:50)－5 合(12:35)－尾白川出合(13:55)－西坊主の沢出合(15:35)

河原は雪がしまりラッセルなし。ハングから垂れたツララの裏の氷洞に B. P. を作る。超快適！

2 月 17 日(曇り→雪)

西坊主の沢 F1 登攀開始(6:35)－北坊主の沢登攀開始(8:15)－ザッテル(9:50)－本峰(12:30)
－横手(16:40)

西坊主の沢 F1 中段でハミングバードのアイスハンマーのチューブピックがひん曲がってしまい、中段の雪壁から右岸の樹林帯へ逃げて出合まで戻る。応急処置後北坊主の沢を駆け上がる。技術的に問題ないがレストイングでまずつらい。坊主中尾根経由で本峰を踏み、黒戸尾根を駆け下った。

29. 北岳、甲斐駒ヶ岳

【メンバー】引地(OB)、鮎沢、斎藤

【日程】1986 年 9 月 13 日～17 日

9 月 13 日(晴れ 曇り)

広河原(17:30)－御池小屋(18:50)

9 月 14 日(雨、曇り、晴れ)

6:00 起床。雨のため沈とするが、9 時ころから晴れ間が見える。残念。

9 月 15 日(曇り)

起床(3:10)－出発(4:10)－下部岩壁基部(5:25)－d ガリー大滝 2P－下部フランケ 2P－4 尾根(ノーザイル)マッチ箱手前のコルからアップザイレナー上部フランケ 1P－4 尾根 1P－ハイマツテラスからアップザイレナー中央稜ノーマルルート 5P－登攀終了(11:30)－北岳(11:40)－御池(13:00)－広河原(14:05)－引地さんと別れ鮎沢、斎藤はバスで北沢峠へ(14:30)－北沢小屋(15:30)

ルートが判然としなかったが中央稜で吉尾 浩弘氏のパーティーが先行する。もうかなりのお年のようだがさすがに身は軽そうだった。山頂で甘利さんの話など伺う。鮎沢、斎藤は赤石沢を目指す。

9 月 16 日(小雨)

起床(4:00)－出発(5:20)－駒津峰(6:50)－甲斐駒ヶ岳(7:50)－8 合岩舎(8:25)－A フランケ恐

竜カンテ下でビバーク(10:50)

9月17日(晴れ、雨)

起床(4:00)－A フランケ赤クモルート取付き(5:30)－登攀終了(11:30)－黒戸尾根を下山
終了間際から雨が降り出し、B フランケへの継続はキャンセル。赤石沢の壁は広々としてデカく日本離れしている。なかなかいい。

30. 明星山ダイレクトルート左岩稜

【メンバー】鮎沢、斎藤

【日程】1986年10月22日～25日

10月23日

朝、小滝着。雨のため駅で様子を見る。雨足が弱くなったところで9時ころ林道に歩き始める。11時ころ T. C に着く。天候すぐれないため沈。

10月24日(晴れ時々曇り)

起床(5:45)－T. C 発(7:00)－ダイレクトルート取付き(7:50)－登攀終了(15:10)－小滝(17:00)
－TS(17:30)

まあまあの天気。小滝川の水量が多いため、渡渉して取付きへ。昨日の雨でスラブがぬれており1P目は悪い。人工登攀が主体で疲労が激しい。登攀が終わってほっとするが下降路が不明瞭でヤブ漕ぎとなる。

10月25日(晴れ)

TS(6:45)－左岩稜ルート取付き(7:25)－登攀終了(10:15)－小滝川(12:00)－TS(12:30～14:00)－小滝駅(16:00)

31. 明星山 P6 シバタルート(p20の報告とダブるが・・・)

【メンバー】鮎沢、外池

【日程】1986年10月31日～11月1日

10月31日(晴れ)

横手－甲斐駒ヶ岳5合目－横手－(バス)－日野春駅－南小谷(ステーションビバーク)
当初の計画では甲斐駒に登るつもりだったが予想外に雪が多かったため、明星山に転進したのだが・・・。

11月1日(晴れ)

明星山 P6 シバタルート

<コメント>

トレーニング不足で力が落ちていたうえ爆弾のように降ってくる落石にすっかりビビってしまった私(外池)は全く使い物にならず、終始鮎沢氏に頼りっぱなしであった。明星山は終了後の下降もなかなかシンドくて余程岩登りが好きでなければ来られないなと思った。

32. 早池峰

【メンバー】石丸、白石、斎藤

【日程】1986年10月9日～11日

ルンルンハイキング山行